

本来性／非本来性をフィーチャーした「骨

太の読解の試み」

【書評】須藤訓任 著 『存在と時間』第
二篇評釈——本来性と時間性』（岩波
書店）

近年日本でのハイデガー『存在と時間』に関連する出版物の刊行は、従来とはまた異なる雰囲気での活況を示しているように見える。『存在と時間』それ自体の新邦訳が三種類出版され、また新書という形式で『存在と時間』について入門的な解説を提供する出版も相次いでいる。そうした（紙の）出版物が広く一般読者の手に取られており、学問研究においても、狭義の哲学の範囲を越えて人文科学という範囲にさえとどまらず、幅広く読まれ参照されていることの証ではあろう。

とはいえ、『存在と時間』という書籍を読み進め、読み通すことはなかなか簡単ではないことにおよそ変わりはない。この哲学書が、「そのうちでも特に第二篇が（…）読もうとしても、そう簡単に読解の試みに応じてくれないことに、苦い体験ややり切れない思いを味わわれたことが」（v頁）ある人は少なくないだろう。「本書はそういう方を念頭に記された、と言っ

てよい」(同)。

簡便な新書形式とは異なる、分厚い単行本というかたちでの『存在と時間』の注釈書として、この須藤訓任『存在と時間』第二篇評釈——本来性と時間性』（以下『第二篇評釈』と略記）は著わされ刊行された。たしかにこうした厚い注釈書は日本語の出版物ではジャン・グレイッシュ『存在と時間』講義——統合的解釈の試み』（法政大学出版局、二〇〇七年）以来のものであるように思われ、また日本語原著としてはおそらくほとんど類例のない書籍であることだろう。しかもこの『第二篇評釈』は、嵩のある重厚な単行本という見かけが予想させる研究者向けの相当に狭く専門的な論述構成という体裁をとるものではなく、むしろ、ハイデガーの他の著作やハイデガー関係のいわゆる二次文献への言及を必要最小限にとどめるといふ趣旨で執筆されているものである。そのような意味で、より広い読者層へと開かれたあり方を親切にこころがけている一冊、「ハイデガーないし『存在と時間』に大きな興味をもつが、第二篇の読解に挫折を余儀なくされ、悔しい思いをしていて、何とかしてその文面に理解の見通しをつけることを念願する、そういう一般読者」（xi頁）を念頭に置いた新刊書である。一読者として、この新規なる充実をおおいに歓迎したい。

複雑な内容が豊富に詰まった『存在と時間』という書につい

て、なんらか解釈ないし解説を論文や単行本の形で提示する際には、解釈のポイント、解釈のキーワードとしてなにかを選択し設定することが必要になってくるだろう。たとえば、「道具」がポイントに設定されることもあれば、「不安」を軸にして解釈が論じられる場合もあり、あるいは「時間」、あるいは「現前」、また「被制作性」や、ないしは特定のハイデガー以前の哲学者の思想との対決・破壊がクローズアップされることもあったし、これからもあるだろう。

この『第二篇評釈』は、私の理解では、本来性／非本来性という概念を解釈のポイントとして設定する種類の『存在と時間』論であるといつてよいように思われる。そして本来性／非本来性という概念を綿密に問い進める際に本書で重要とみなされるのは、本来性と非本来性という二つのものが区別されるのだとして、しかるに本来性と非本来性とに共通のベースとなるような構造がなにかあるのか、どうか、もしあるとすればそれはどのようなものなのか、また、もしそのような「第三のもの」（ないし「より根本的な第一のもの」）などはないのだとすれば、その場合には本来性と非本来性とはそれぞれどのような構造をしておりどのように非対称的に関連しているということが帰結として見えてくるのか、といった論点である。

本来性／非本来性に徹底して焦点をあてた、こうした緻密な問題設定からの『存在と時間』解釈の試みは、たとえば仲原孝

『ハイデガーの根本洞察——「時間と存在」の挫折と超克』（昭和堂、二〇〇八年）に先行する類例を見出すことができるように思われる。はたして実際に、『第二篇評釈』では——先述したように本書では研究的二次文献への表立った言及はごく抑制されている——フォン・ヘルマンの仕事とこの仲原氏の仕事は、数少ない、例外的に表立って論及される文献になっている（¹）。「Indifferenz」という語の解釈・訳し方などにかんして須藤氏の見解は仲原氏のそれと類似しつつときに異なるものとして展開されてゆくが、「Indifferenz」に非常に注意深く着目するといった問題設定の枠組みのレヴェルにおいて、両著作がたいへん有意義な近さを持っていることはたしかである。

本来性／非本来性という事柄をクリアに軸として据えつつ、じっくりとロジカルに第二篇を読み進めてゆく本書の歩みは、そのロジックに歩調を同期させることに成功した読者にとって、一種の爽快さ、「清風」（ix頁）を提供しうるものだ。ところで、『存在と時間』公刊部分の第一篇と第二篇との論のつながりを明示しうる概念・事柄のひとつとしては、「不安 Angst」が着目され取り上げられることは従来も比較的頻繁であったように思われる。しかるに、『第二篇評釈』もまた「不安」概念を重視しつつも、しかし同時に「不安」についてのハイデガーの論述の仕方をめぐって、その不十分さの指摘も紙幅を割いて

おこなっている。おそらくそうした指摘のなかでの極点のひとつは、三五二―三五六頁で展開されている、『存在と時間』の原著三四四ページにある二つの段落についてそれらが「不必要」であり「削除を提案」する、という議論箇所であろう。スリリングで興味深い「提案」である。この提案に読者は賛同するだろうか？ それとも、そうしたプロクルステス的手続きには賛同しないか？ ――もしくは、その興味深い「提案」の内実をさらにもっと詳しく教えてほしい、それから判断したい、と思うだろうか。

この問題にかんして、ひとまず個人的にはごく間接的なコメントにとどめておくことにしたい。どのような間接的コメントかと言えば、それは、『存在と時間』第一篇において主要な事柄・概念として登場していた、「世界」(あるいは「世界性」)にかんしてのものである。第二篇の読解に丁寧な専心する『第二篇評釈』においては、「世界」概念についての著者の理解がどのようなのかを読者がつかむための材料は、同書の趣旨からして当然ではあるが、一定数はある(2)ものの、必ずしも多く提供されているとはいえない。だから、本書の続編ないし前編となるこれまた分厚い『第一篇評釈』の刊行がぜひとも俟たれる次第である。その続編ないし前編を拝読玩味したうえで、先に紹介した「削除」提案等にかんして、講究をしみたいと思うものだが、それは強欲すぎる願いだろうか。

註

(1) 「著者ハイデガーがいったんは書き上げたとされる第一部第三篇「時間と存在」の出来に満足できずその原稿を破棄した(…)研究者の関心はこの第三篇の内容に向かうことになった。この関心が実らせた最近の成果としては、本邦では仲原孝氏の『ハイデガーの根本洞察』(昭和堂、二〇〇九年)を挙げるができる。存在一般の意味としての「とき性」と実存の「時間性」とが同時に相互に連動もすれば断絶することも求められるという、一方を立てれば他方が立たないねじれた排他関係に、「時間と存在」の挫折の最大の理由を見極める同書は、世界レヴェルの研究として評価されるべきものである。とはいえ、果たして「時間と存在」だけに『存在と時間』そのものの未完成の根拠があると考えてよいか」(vii頁)

(2) たとえば三二〇―三二二頁には、「zeitlich」というドイツ語の単語が「時間性」というといかにも抽象的で哲学的な用語に響くが、そうではない。「この世の時間というか、うつろい儂い時間的存在としての浮世」という「ニュアンス」を保持していることとの関連で、「世界」概念が「世俗」や「俗世」という意味で解されうる側面についての指摘が、適切にも記されている。